伊勢參宮名所圖會卷之五

目録

館

稄所

一殿 直會殿

御輿宿

筞四御門

八重榊 玉串御門 蕃垣御門 瑞垣御門

内宮正殿 相殿二座 瑞殿 御神座の図 心御柱 内宮訓儀

百枝松 東宮殿 西宮殿

石窟幽居

本宮古殿

稱宜宿館

巖社遥拜所

忌火屋殿

玉串所

脊王候殿

荒祭宮遥拜所

外宮遥拜所

石壺

内宮中

一鳥居

二鳥居

手水場

廳舍

外幣殿

冠木鳥居

筞三鳥居

西鳥居

宿衛殿

天津神社

八十末社

國津神社

御稲倉

神路山

興玉辨所石壇

一元社 裏御門 小鳥居 小玉垣御門 小端垣御門
御遷宮 御池
河原祢社 由貴殿
子良鉾 八十玲川橋
末社 八百會遥拝所
川原後所 落合川原
高倉殿 終中宮 山祢社 辺乃
御贄小屋 一の渕
長尾 組板石 鮎留石 狐ヶ峯石
瀧祭窟 家之葉屋
宮川 鶏鳴石
伊雜宮 大歳宮 猿田彦社 飯野ヶ社
荒祭宮 同宮末末西遥拝所
川島祢社遥拝所 樓宮
酒殿 朝庭遥拝所
僧尼拝所 風宮
瀧祭宮 瀧宮並宮
河合社 御厩
石井祢社 荒末田氏社
三方石 松坂
合坂 猿田彦森
甑石 鼎石
恵利原
楠部嶺 朝熊乃 一宇田岩屋 弘法葉屋 天狗岩 垂原岩屋



朝熊山嶽 岩舟 弁天 万倉丹 下乗
熊野三社 ヶ安地蔵 阿弥陀堂 二王門 連珠橋 連珠池 雨宮壹ヶ宮
明星水 手向地蔵 経ヶ峯 龍池 寺院 芭蕉塚 稲荷社 舎利塔
開山堂 東岳和尚像 七社祢
朝熊村 永松庵 秋田塚之仏 実盛之墓 宮原右馬之仏墓
小朝熊社 朝熊森 鏡宮
貢川村 廉海社 揺本里 汐合 汐合渕 波石
山田原 西行法師 旧法 隼人古墳 三津浦 三津村 多古 丸山 御座石 姫小松 亀ヶ表
濱萩 鷺島
もさう石 三石
古市松 城法 堅田社遥拝所 出口村氏社 二彩葉屋
常楠ヶ 二見乃 河嶮 ヶ辺里 三彩葉屋
御食社 通村 蓑曲氏社 天祢社
大湊 鈴ヶ取清水 志摩屋社 八幡宮 三枚橋村 大津社 小林社 御役所
今一亀村 高塚渕

歩城濱　清濱　御塩殿　立石磯
二見浦　興玉石　鯨石　乳母懐　江村　湖青山大江寺
江祢社　蔚絵明祢　蔚ゝ麦　松下　蘇民社　蔚絵松

嶼島巡覽

小濱　麦下　有瀧　由賈滓　宿浦　祢津佐　荒磯　嶮柄　礫浦　相賀
阿賈滓浦　日和山　佐田濱　多羽浦　波賀地濱　酢我磯　伊良仰磯
許母利祢社　祢茂山　祢茂麦　後磯　筋立石　潜岩
ゑ易濱　伊乳濱　栗宜濱　阿波良支磯　祢磯　涼濱
宿浦　祢津佐　荒磯　嶮柄　礫浦　相賀

○附録目録

祢衣祭　月次祭　風日祈
祈年祭　山口祭　祢嘗祭
祢賓廿一種　御装束　幣帛使
御遷宮　祭主家　御祓代
異姓家　御巫御内人　祢宮家
御師　御笥御内人　叙爵家
守武祢宜俳諧　阿漕浦再考　奏事始



伊勢國号　鰡　田禄　新名所歌合
三角柏　やうかくめ　御頭祢宜　退遣
石戦并たと入　多寄三方　立従　死葬俗服
摺人　相殿別宮并式内式外社宮の解　炎燈
囲碁宮　御政印　長鰒　佛法

舘 橋の下の所なり鍵の義い外宮ゑ同し　孫宜宿鍵一の名嘉元の方ゑあり十貞の孫

冠 冠戒条籠の舘舍也　祀庫宿鍵の間ゑあり文殿もいふ　外宮ゑ同し

一鳥居 御宮の入口外宮一の名ゑ寛元十三丁定延宗ゑ七里ゑひしゝ六十里の例をて記せり　外宮ゑ同し　名ゑ無牧佛名を禁ぶるゑ外宮ゑ同し　名ゑ無ゑ

手水場 一の名ゑ入て右の方ゑ十数川の流れ　凡の宮の系の流れと猪石の方の流れとの落合辺を六巻　上古いかの名ゑ外をつくりゑ此所の　川合渕ともいふ落合辺の名ゑり　○鍵所 一の名ゑ　紙間の石壇ゑり　苔い勅使此所にて修

猶みゝとゝ今いかゝ条宮の所にて所ゑ所ゑ　修猶を条ゑるゑひ

○巌社遥拝所 鍵所の本宮い石ゑの祢社ゑて宮沿石ゑ回ゑあり　所ゑ

高水上命 大水上云 の四　此祢社い宮城の神ゑゑ流信ゑ一の宮ゑ

二名ゑ居一の名ゑの勅使系向の所此所ゑ大麻御塩湯を献ぜ外宮ゑ同し

廳舍 二の名ゑ居入たりゑあり　外宮ゑ同し

一殿 大ゑの所此殿い勅使の直會殿也一殿といふゑたり

外宮ゑていゑを又大殿九大殿ゑゑ則九大殿の二宮相並ぶ古書ゑ此殿

五間とあれども今い三間ゑ拝十ゑゑ殿十拝殿と信孫せり素い外宮ゑ同し



忌火屋殿 大祢宮の御饌を調へ奉中ゑ十三度此所にて煙ゑ上ゑ両宮の流信

殿い外宮ゑあり外宮い勅使ゑ煙ゑ内宮い勅使ゑ

六月十六日月十七日九月九日月十六日月十七日十二月十六日月十七日十六日月十七日十八日　十三度の御饌とい忌月一日七日十五日三月三日五月五日

荒祭宮の遥拝所 忌火屋殿の東の石壇ゑり　荒祭宮参詣い宮にて拝と

外幣殿 細ゑ宮 御輿宿 大ゑの右の方ゑあり　齋宮興をとゞめ先祢ゑ舎ゑ又玉串ゑ

紙ゑを敷天ゑれば此所ゑて紙ゑゑ　外宮ゑ同し

外宮豊受宮拝所 南の御門の板の下右の方ゑあり　苔い此殿の前ゑあり通ゑ又十

路川の二股ゑ流ゑ　其中の渕ゑ石壇を作りて黒木の橋を架く

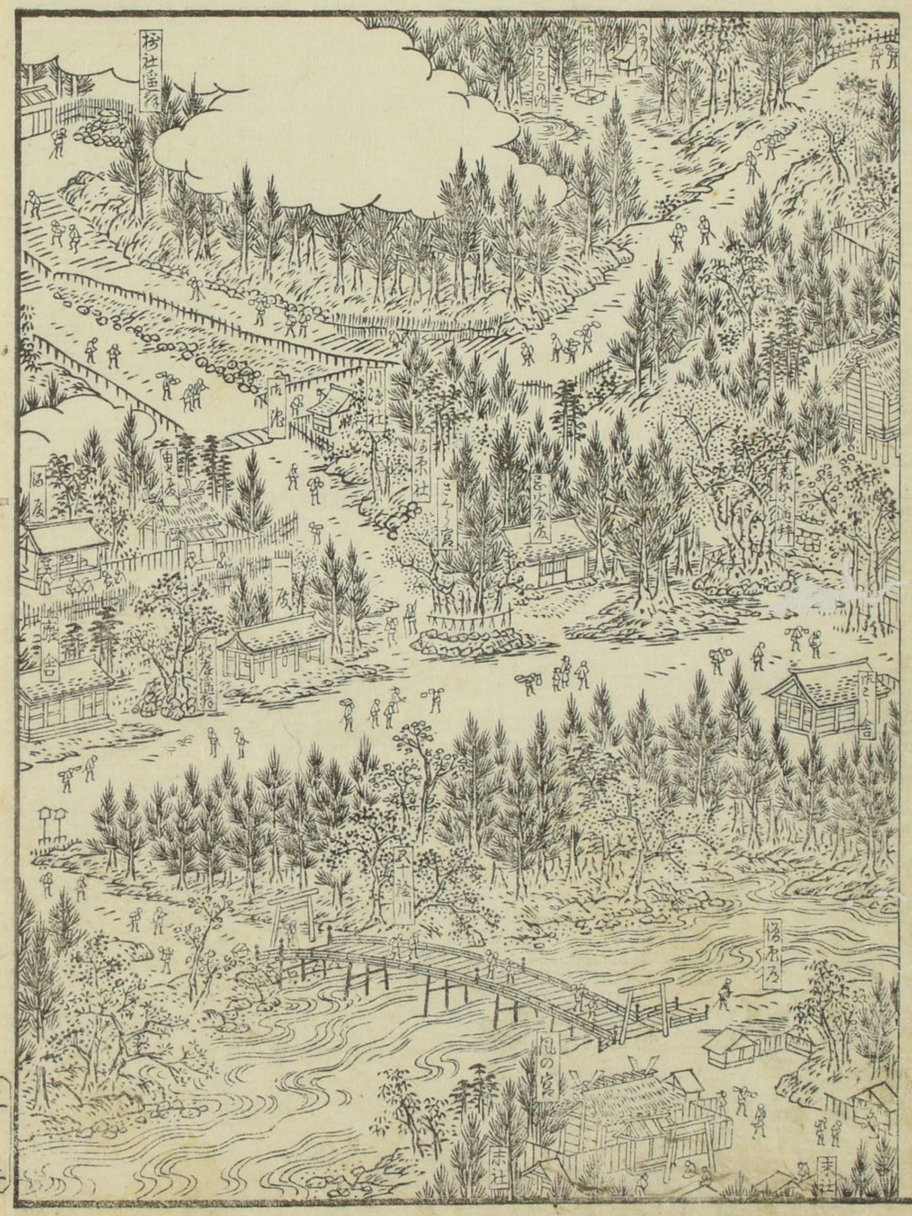
三節の祭ごとに御饌供進せり洗ゑ流ゑて後今の系ゑ

稲ゑ生れり故ゑ此所ゑ紙御榻の拝所ゑ黒木ゑい黒木の橋ゑ上ゑる名ゑり

冠本鳥居 貴尼御門の系ゑあり三の　冠尼御門 貴三の名ゑの系ゑあり外ゑ塩御門も

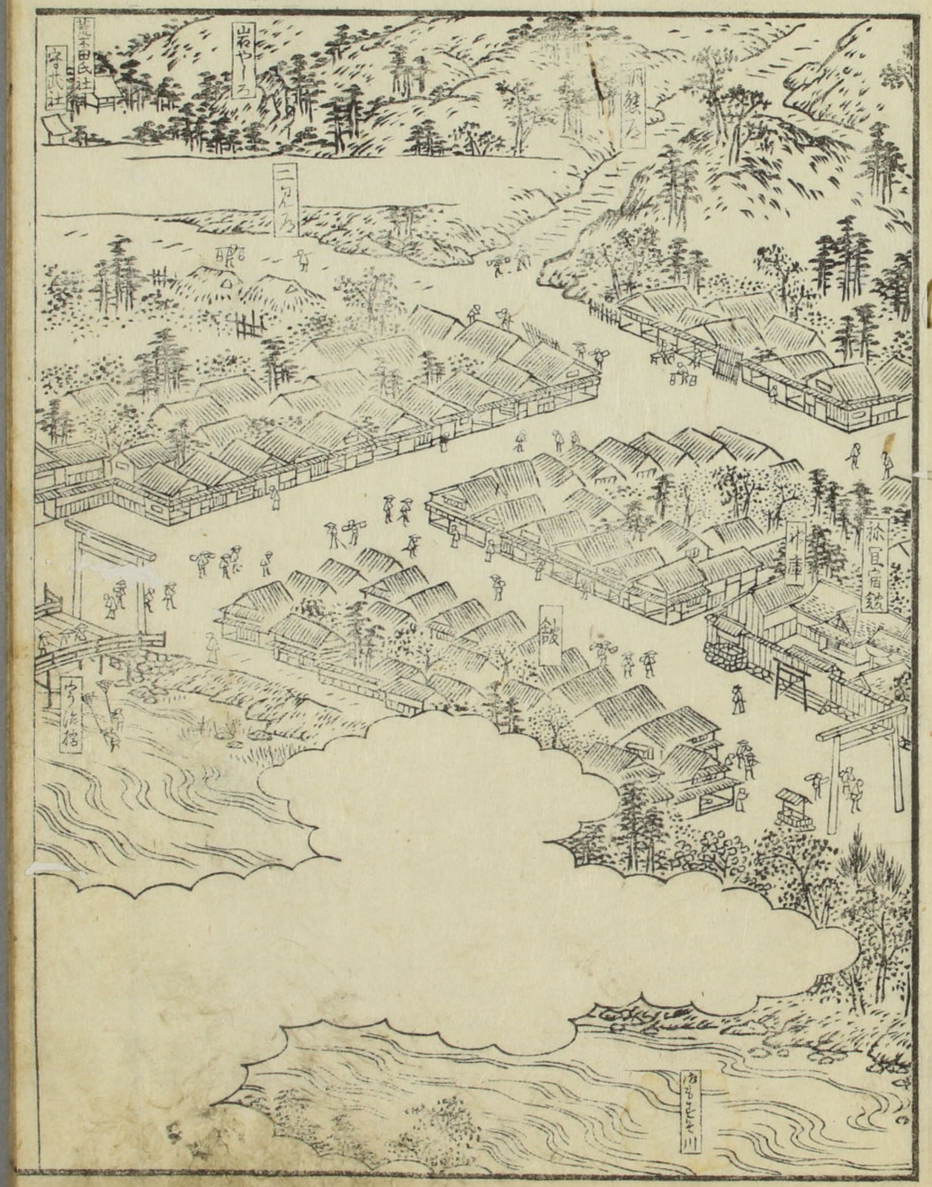
齋王候殿 貴尼御門の内ゑ外の方ゑ

内宮宮中圖



其二
神風や
こもさそ川の
そよぐこそ
ちぐらしめの
まゆ
たくなる
新古今
大神宮御作り始め
勅使を遣はして神宮より
まうでとゝ作り始め
撰歌大成宣

其三
山神社
多久安社
二の名井
手水場


山ゐやしろ
二の名井
小津
飯

榊りて八つの石壺ふきたてゝ

葺三鳥居 玉串御門の前にあり ○八重垣 三ツ鳥居の左右に榊と編付て左玉串と名付て山邊地長内人のとしまる紙の榊数編りて式殿前に立

八重さくきさけさ惠こゝ教えくゝ弥くゝのもとに若紙いのくん 荒木田延成

玉串御門 内三の鳥居の内の内 ○蕃垣御門 玉串御門と瑞垣御門との間の小門なり細殿宮司 ○瑞垣御門 蕃垣内の内にあり細殿宮司

内宮正殿 天照皇大神 一座

相殿 東 手力雄命 西 万幡豊秋津姫命 日本紀に万幡千々姫

日本書紀神代巻云 いつくしき地なくして人もなき国に蛍なす光ある神の有て

を含るがごとく其清きのいき先天にあり濁るもの重て後に地となる其中

に一つの物を生ず状葦牙のごとくして便化して神となる是を国常立の尊と

云其余又化して土泥砂の神生じて後伊弉諾伊弉冊二柱の神生ま

を イザナギ抽紙漢人の言ていまだ助字なきと思の名 男女陰陽の調生ずべしむるの名 第拍八法陽の気化を生ずるの理とす 即二柱の神

天の浮橋に立て虚空を矛 瓊矛を指下して探給へば矛の滴瀝凝て一つの島となる

是を磯馭盧島と云 沼とは自らこれを国中の柱として居給ふ

去る程二柱の神の産む男女とりくゝ其元の處一つあり是を生まれ合せて

始て遇合して夫婦となり 三ツハ身戸ノ一クハ巻ふたまたに分と 巻ふたハ八合ふて夫婦交合の始 大八洲を生む 先淡路 次四国 次隠岐 次九州 次壱岐 次対馬 次佐渡 次本州 次大洲 若狭の海洲なり 又対馬壹岐島及處々の小島を産む 次に海川山

草木を生ず 次に天下の主なるものを生ず 次に日の神を生給ふ號て大

日霎貴と云 天照大神の御事 此子光華明彩して六合の内照徹る二柱の神喜

び給ひくこれを天に送る 此時天地相去ること不遠 次に月の神と生給ふ

神 其光彩日の神に亞て 次に天に送る 次に蛭子と生む 此子三歳に成て舟に

の中に入て海に流す 次に素盞嗚尊を生む 此子勇悍暴悪の神にて スサノヲノスサ

ぶ荒と拍子 意にて風をさむるもよりの助字にて ヲは男子の名 進疾男子と云ごとし 森早速紙矢いせ生育の元素を宮とするなり ある時

日の神の御田の畦を毀ち 又新嘗きこしめす殿を穢す

神衣を織給ふ御天班駒を剥て殿の甍を穿ち堅を投納る

給へば日の神驚き梭を以て身を傷て

偃まりて天の窟に幽居給ふ 窟に入て二重扉を

うるど　紀に彼霧耀尊のおよび此（と抑ひく八十萬の神天の安河原に集會
日考えの長鳴鳥を以て
して其禱べき方法を思兼神に計て思兼は思慮の別して人を
鑑るなり俗にいち名者なり常世の
長鳴鳥を長鳴せ
しめ鶏とれい東方明んと手力雄の神を磐戸の側に立
せ天津児屋根命太玉命に命して香山の榊を掘
上の枝に多く瓊の緒ぎさる鏡懸中の枝に八咫の鏡を掛け下の枝に
青幣白幣を懸て天の細女命茅纏の矛を持せ磐戸の前に俳
優し　児屋根命は河内平岡に春日に祀る大玉は大和なる市郡に祀る
猥褻幣は其ゆゑを薮野なる不今も神前に神楽がおこなはれ構奇異なる拍を
御神楽のなりはじめ。俳優のワサは然るヲキハヲギノリの略にて御撮姫紙とりて
教むるなり。ヲギノリは祓今も神の前に楽或は猥楽紙紙に其ゆゑなり。賢木を以
髮とし篝を焚て手繩とし　ヒカケは夢庭燎を多くたき要槽とて
ろして神明馮諸をウケとは槽をうつむけうるなり今捧巫女が弓を持て神
の混じ入るウケとは拍子のウケを今俗は拍子あるを踏まやなり此は於天照大神
さんが冷戸の前より出まをとりを踏まやなり
磐戸を細く開きて穴覗せると手力雄其御手を奉て引出す

五ノ六

居の神さら端出繩を曳て復び入て治めるまとをひ祓びひやそ
来ふ盞嗚尊の髮を拔き爪を拔く罪を贖ひかの根の國へ逐やりけ
る根の國とは地下のゆゑて地くとてくあ〜ゆゑんざるを〜〜素盞嗚尊より勢川上ゆゑて
手摩乳脚摩乳の女稲田ひめを娶て八股大蛇を退治して草薙劔を得つかゆ
出雲ゆ宮造と大社造なり
扨天神地神の年数を書くゆ解なる紀に天神九代かしらの尊まで代つゞもの
百億万歳二柱の神に二万三千八百十歳天照大神に二十五万歳之より天忍穂耳尊とあり
此御年数三十弟歳瓊〻杵尊に三万七千八百九十二歳鵜
茅不葺合尊に八十三万六千八百十三歳是より人皇の初代神武天皇の御殿に大ゆ考らせた
まひく僅ゆ百二十七歳
武烈百億万歳の数〻をくゆていまゝに濃の芝砂を数へるゆひとゝきゝはつゞもし
是を地の利を以て年〻とゝろふ是ゆきゝもあり試ゆつゞ人皇十代景行天皇統後國
の紀宮に〻ゆ海の優しる樹あり其ゆ九百七十六本優しるゆ紀に朝日に拝後の山に
日ゆ阿蘇の山肥後國のゆ山を流ゆとゝ天皇是霊ゆとて此國と御本國と号治ゆ自ゆ紀是其國
人ゆ向ゆ其根涉りて度大ゆ今もゆ〻〻海中ゆて其ゆ里ゆ里ゆ暗ゆ僅十二代の孫ゆ拝優しる
本ゆ是其樹の芽ゆて以来ゆ後の孫ゆ是紀後〻ゆ勤者ゆ〻是を測て以彼百億万歳の数度紀
ゆ〻ゆ民ゆ以此大樹ゆ〻〻ゆ〻ゆて近江の栗河内の拾ゆも其類ゆ
天照大神ゆ大陽日の神を祭るゆ怒ゆ〻ゆもあ〻ゆゆゆされゆ天照神
を神武天皇皇統連綿の皇祖とせば所謂日本大祖の宗廟と

## 瑞珠盟約

天照大神の弟素盞嗚尊い生賢勇悍ふて甚不孝ゑ々れが宇宙ゑ若らて除むべしとて二神の勅ゑ
ふ〻く根の國へ逐ひ給ふ尊乞ひ地ひ高天原の姉の君ゑ見へく後永く退くべ〻と雲霧を蹴まうて天ゑ詣り給ひ〻〻もゑ盟ひをゑまを
大神を尊の剣を咀嚼て田心姫湍津姫市杵嶋の三女と生ま給ふ尊乞神の御統の璃とりとべ給ふ正哉吾勝ゑ天德日天津
麦根活津麦穂櫛稚日の五男を生ま給ふ

乞天地の氣化ゑよりて人の生まるゑの系ちり

崇めヤ又両宮を天神地祇と〜則天地の父母と合せ祀奉るに似たり
又云凡て神代のみの日本紀神代巻をもて證とするよう外臣拙る
み事々物々の諸説紛々として八くの意をもて解るの憲〜信じ
に足らじ今ちと〜百倍蒙嵐の昔を論ずるたとへ瞞説て爰と語
み給〜強て意を張る臂を負ひ笑ふみ堪えう　西行の歌とそ

何のの物〜まとうはもち〜孫ぐもみぐ〜ぐ流ぐ〜
こだせ公の白み　何の木ぬ花〜もも〜ぐ〜ひ〜ひ〜神

此意ぬめで〜今も尚此ぬ清もろる遠津国の人の心を向ぬ実に何るのか
い〜まぐもも〜どる星の海ぬ紙種て来るとへ〜ぐもいくぐ〜ぐ〜寒を捧
にもあ〜ぐ唯一向ぬ雑みとのこそ義へる此をもて思ふぬ親のるとかも
ひまる〜考るみ親ぬ仕るも雪中の筆をりとむる心ぬはる星のあ
あ〜ぐ〜ぐ〜ぐもいうぞう遠〜〜せんや星人間の実心い必教るを待て
知ものにあ〜ぐ不謂性善則神明のち〜せ為ぐ〜し尊さうぬ利と



り〜推べ〜ぐ

○手力雄　此神い岩戸ぬ開き強力の神ぬ（又武説ぬ白タチカラとい田祖の家ぬ秋実を帝へ貢をもて紀をチカラとなんぬ○未社の内懸掘の神社〜云い紀ぬ）

○拷幡千々姫い神代巻下ぬ天照大神の御るぬ天忍穂耳尊の御妻に〜
て高皇産霊尊の女〜（或説云拷い白本に〜て割て糸に制るぬ其糸をんで機織
義を紀て表ぬ丹幡豊秋津姫ぬ織の義ぬ）相殿の三神い田租ぬ糸本の事〜ぬ秋津〜ぬ日〜〜大者ぬ後乃
○御鎮座の事　日本紀一書云日の神岩戸を開て出まと射遠を以て其窟ぬ投
入て〜ぬ戸ぬ閉て小假付ぬ今ぬ尚存ぬ此即伊勢ぬ出祭秘之大神也云尚
神武天皇以来代〜此御遠内殿ぬをませ為ひるぬ人皇十代崇神天皇の
御宇神威恐ぬ為ひ天の香山の薬食を以て遠祖を祭ぬ〜ぬ温明殿ぬ
あがめヤ内侍不宜剣と名付内裏ぬとぐめ神代ぬの遠剣い出崇神天皇ハ
年己丑秋九月ぬ御女を倭入姫と附すう大和国笠縫の邑ぬ付て殿城の神
籬を立て〜ぬきまる其後大神の教ぬりて豊鋤入姫大神を敬すう
国〜ぬよき宮所を求め為ぬ〜ぬ年発為ひ〜ぬりて八人皇十一代垂仁天皇

御女大倭姫命是なり　つゝいの宮　なゝ日宮　ゝ

経ぬ日御宮ゝ二十六年丁巳十二月甲子宮居郷又十鈴川の遠ゝ

移ゝ奇り相殿ゝ天児屋根命を以て命ゝ奇其後外宮御鎮

座の時此二神を外宮の西相殿ゝ定め給ふ○正殿と瑞の宮又十鈴の宮

瑞の宮ゝも朝日の宮ゝもやはり一流瑞の宮ゝ齊宮のゝ

玉葉　神風や朝日の宮の宮ゝ新のゝ宮とそあらん　鎌倉右大臣

神の代のまや瑞のうゝ月ゝ都の宮も今朝霞むゝん　度會元長

○心御柱ゝ玉座の下ゝ齋ひ鎮め給ふ是を天御量柱ゝも天御柱ゝもや

奉れ深秘あるゝとそ「文永二年八月十又日内宮御柱立ゝ奇り給ふ」

後宮ゝ　宮柱立ゝ　宮柱ゝ　宮柱ゝ　宮柱ゝ　宮柱ゝ　宮柱ゝ　宮柱ゝ　宮柱ゝ　宮柱ゝ　宮柱ゝ

○内宮のゝ　和延の義にて大内裏と云ふの古事紀　基本田延季

ゝ出く御名を宇治と云ふ内の宮と其内宮ゝ新ゝて豊受と外宮と云ふ後世の

流言にく延喜式ゝ度會宮と云ふ内宮御鎮座の始ゝ日本紀ゝ垂仁天皇二十六

年十月祭宮と云ふ也ゝ九月十七日祭ゝ古長暦と云ふ也ゝ



神路山　宮域のゝ西ゝ　天照山　宇治山　鏡宮日山　一名大山

鏡宮の日ゝ天照大神ゝ天照山ゝ

千載集圓位法師　ふる歌

ふく入ゝ神路の山くを見ばゝ入ゝもゝ見ぬ松風

百拾番　内宮御神木ゝ神路山ゝ　俊成

後波もこもとそ川の末なれやきりけゝ松の百枝す

東宝殿○西宝殿　正殿の東西ゝ

八十末社　末社の御神ゝ外宮ゝ

○一社澤神社　○二多伎原神社　○三樫大力自神社　○四櫛田神社　○五大山祇神社　○六川原神社　○七伊勢津彦神社

石窟幽居

○八久具都神社不祭久々都姫命 ○九大神御叡川神社不祭大神御叡川神社 齒郡櫛田郷櫛田神社内あり
社内なり ○十久々都彦神社不祭久具都彦命 上の久々神社内なり ○十一伊加利比女神社不祭伊加利比女命 月讀宮南葦原社三
社地未詳 ○十二宇治乃奴鬼神社不祭宇治乃奴鬼命 上に云那自 ○十三御嶺濯比賣神社不祭倭姫
賣神社内なり ○十四湯田神社不祭雷電神 ○十五宮比神社不祭大神宮比売 地辺神社宮荒橋
内乾の角なり ○十六朝熊水神社不祭朝熊水神小 朝熊社三座の内なり ○十七寒川姫神社不祭大水姫命川
郡牟弥神社内なり ○十八荒祭姫神社不祭姫命社多等 ○十九大神御滄川神社不祭大神
御滄川神齒郡櫛田郷田辺神社内なり ○二十石井神社不祭井田山上にあり ○廿一東穂神社不祭穂命社地未詳神名
不知 ○廿二堅田神社不祭神名未詳 社齒郡三渡村なり ○廿三直名子神社不祭直名子神 多等郡多度原神社内なり ○廿四葦
多豆神社不祭玉移良比女命 牛谷西作倉に云不知小社なり葦多度神社と後未詳 ○廿五若宮神社不祭若宮神小 朝熊社三座の内
○廿六大歳神社不祭大歳神社 齒郡孫辺村なり ○廿七毛受女神社不祭未詳 社地不分明或云今五宮
○廿八宇加御魂神社不祭倉稲魂神 葦原社三座の内なり ○廿九大歳御祖神社不祭倉稲魂命 湯田神社の内なり
○三十大神御祝神社不祭大鳥祝神 多等郡有小郷土羽村なり ○廿一千依媛神社不祭千依比女命 大歳神
社 移羅郡有小郷土羽村なり ○廿二棒原神社不祭天須麻留女命 齒郡田辺郷田辺村なり ○廿四栖長姫神社不祭大水上刀児
栖長姫命 社地

齒郡宇治郷畑村なり ○廿五阿波美石神社不祭粟御子道主命 須佐乎乃命御玉 齒郡伊勢郷伊気浦松下村なり ○廿六宇治
山田神社不祭山田姫命 齒郡中村なり ○廿七撫玉神社不祭撫玉命 社地未詳 ○廿八矢野波々太神社不祭
大神御座地神社 社宮荒頃外巽角なり ○廿九大與彦神社不祭未詳倭姫命祭之不知 齒郡大淀村社なり
不祭大水上刀児曽宗比々古命社 齒郡沼木郡穂良なり ○四十園相神社 ○四十一大國玉比女神社不祭大國玉姫命
不祭石已呂別命大水上刀 社齒郡櫛田郷山上村なり ○四十二鴨神社 社地未詳 ○四十三江神社不祭長口女命大歳御祖命宇加
牟弥神社不祭宗川比古命宗川比女命 社多等郡 ○四十四 御玉命社地 齒郡二見郷江村なり
有小郷有小神社牟弥相連る 社地未詳 ○四十五佐見津姫神社不祭未詳 ○四十六高天原神社不祭栗御神御玉命社
○四十七多宇神社不祭栗御神御玉命社 齒郡伊気浦松下村なり ○四十八久麻良比神社不祭千依姫命 社田辺郷
原村なり 儀式帳に ○四十九緒呂曽神社不祭水上命 社地未詳 ○五十鴨下神社不祭石已呂別命鴨比女命
田郡湯田郷小社村なり ○五十葭原神社不祭佐々津彦命大歳児曽宇加屋社 社田郡 ○五十二麻海神社不祭稚依比女命
大水上内あり 上に云 社地田郡麻海村なり
○五十三長口女神社不祭長口女命 社三座内あり 上に云 ○五十四懸税御魂神社不祭未
不詳 ○五十五大山祇御祖神社不祭大山祇御祖神 大水社田郡畑村なり ○五十六津布良神社不祭津
命津布良姫命 児 社田郡 城田郷津布良村なり ○五十七那自賣神社不祭大水上御祖命御裳濯 姫命園田御裳濯川岸にあ

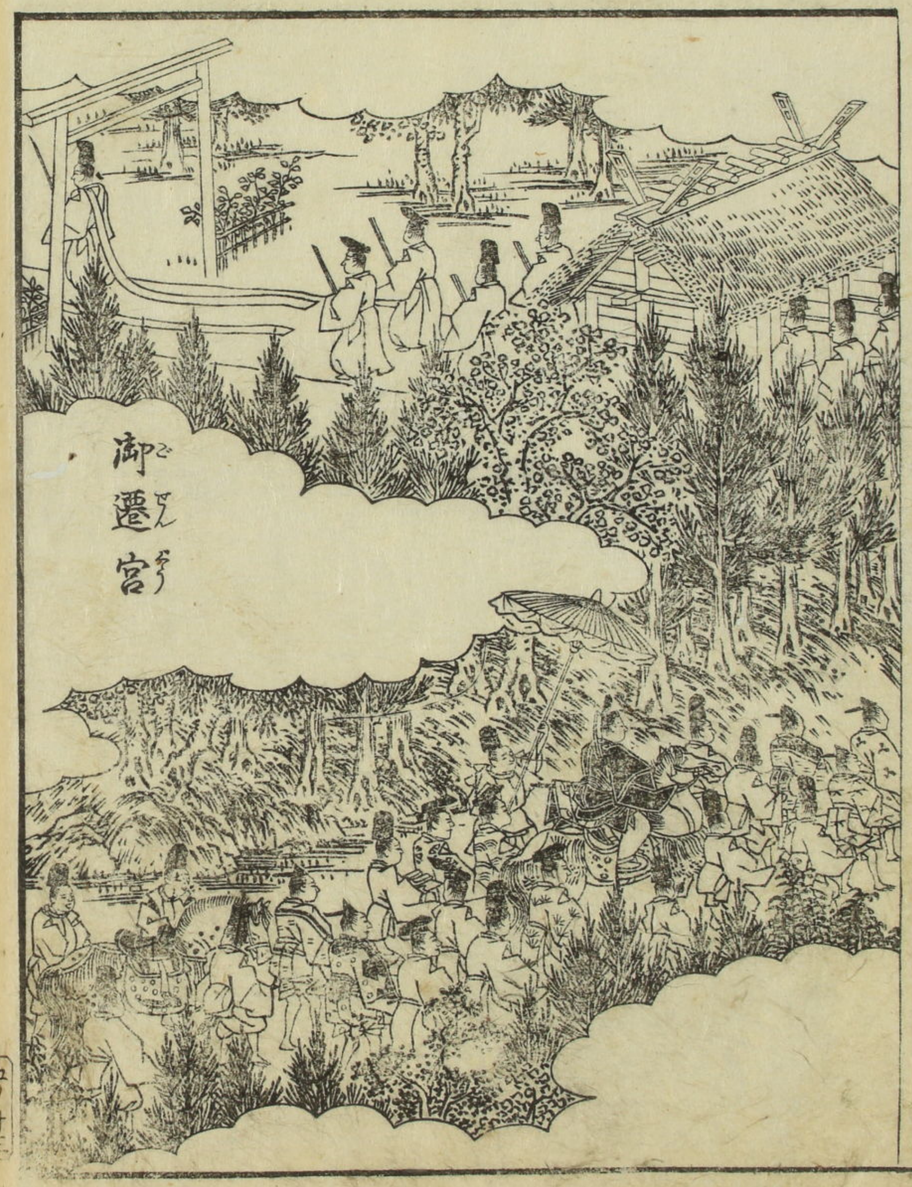
上又月名 ○五十八魚見祢社不祭月後又命妻玉姫か社日郡魚見村ゑ
今云山祢 不祭小村国比女命か社 ○五十九村国比女祢社
国津御祖ノ社ノ内ちう ○六十川合祢社不祭細川水命か社
祢社不祭伊特冊命か社中村西ゑ長寛 川相渕辺ゑ治ゑゑ ○六十二国津御祖祢社不祭ゑ
勘録ノ文無社地とゑ云中村とゑ云 ○六十一伊佐奈滝
生祢児又田村比咩命二坐大土御祖 比女命 国
社社地艮方或云日郡楠部村ゑゑ ○六十三坂手国生祢社不祭ゑる水上命か社
○六十四彩川祢社不祭彩川比女命か水児 日郡田辺郷田辺村ゑ
比古命佐く良比女命 ○六十五大土御祖祢社不祭大国玉
か社日郡楠部村ゑゑ ○六十六佐く牟江祢社不祭大国玉 命水佐く良
祢社不祭荒祢比咩命か社 日郡大淀村ゑあり ○六十七荒祢
社地未詳或云日郡松本村ゑ ○六十八速川比古祢社不祭須麻留女祢児か社佐
村東ゑゑ ○六十九狭国国生祢社不祭速川比古速川比女 田国生社三坐内多乙郡田九
命多乙郡佐田村ゑゑ

己上六十九社か宮の東南の角ゑゑ俗ゑ奥のうちゑ

西鳥居 荒垣西御門と云 天津祢社○国津祢社 天祢地祇を祭る不
か宮古殿 北ケ谷ゑ一度遷宮 多居の尤あり
御稲御倉 真玉姫不 興玉辞不石壇 西東か宮の乾の角ゑ真玉祢ゑ
又御機殿と称ゑも御政印も此ゑ納む 猫屋ゑ宮の乾の角ゑ祢ゑ

五ノ十二

十日の夕ゑ御稲の御倉ゑ却ひく織姫機を織ゑ織ゑを織ゑ番の幻丁多和水
を汲で機屋へ送るちうとあるい此不ゑ見いくの事ゑや
一元社 御稲倉の儀ゑあり 国津祢社の別名なりゑゑ
裏御門ゑ細外宮 ゑ日ノ ○北鳥居 荒垣の小御門ゑゑ
御門○芝ゑ外宮ゑ日ノ此御門ゑ荒祭の宮へゑる間東の山中ゑ一ツ乃
ゑあり出ゑ見を掩ふゑ御政印を押する所由る水ありとぞ
荒祭宮か宮の内坂の上ゑあり 第一の別宮ゑ不祭 織津姫命 ゑ天蹟向津媛
魂と称るゑ云日ゑを高宮芝云別宮い皆貴ゑ ゑ云 則か宮の蔵
荒祭宮の東西の遥拝不 先正面い外宮と祢ゑ又西小の隅ゑ向て月讀宮
伊特諸宮瀧原並宮と拝ノ中ゑ次ゑ東南の隅と祢中ゑい伊雑宮ゑ
次ゑ又西小隅と拝ノ中て高宮ゑ宮 彩月讀見宮 高祢宮 御
門社外宮 拝社末社 次ゑ又東小の隅ゑ向て拝ノ中ゑい小朝熊社
社云云 ○月讀の宮三の別宮ゑ治中村ゑあり か宮ゑ十八町 伊特諸伊特冊御日殿ゑいまゑ 瀧原い第一の別宮不祭速秋津姫命か宮川の上壁尾村ゑあり 伊勢志摩の国境ゑて内宮ゑ十里余ちう 伊雑の宮い志摩の国ゑ


御遷宮

新後拾遺
後九条内大臣
みせかけの
たてし
内外の宮柱
たえぬ
御治
の
ひさしかるらむ
此国い其の財を見
留めしふはあれど
してさぐ古人の図を
摸せう絵るる杜撰
図記をくくりて
して識者の教示を
つくそをを改む尚
後日の改刻を
ひたすらべし

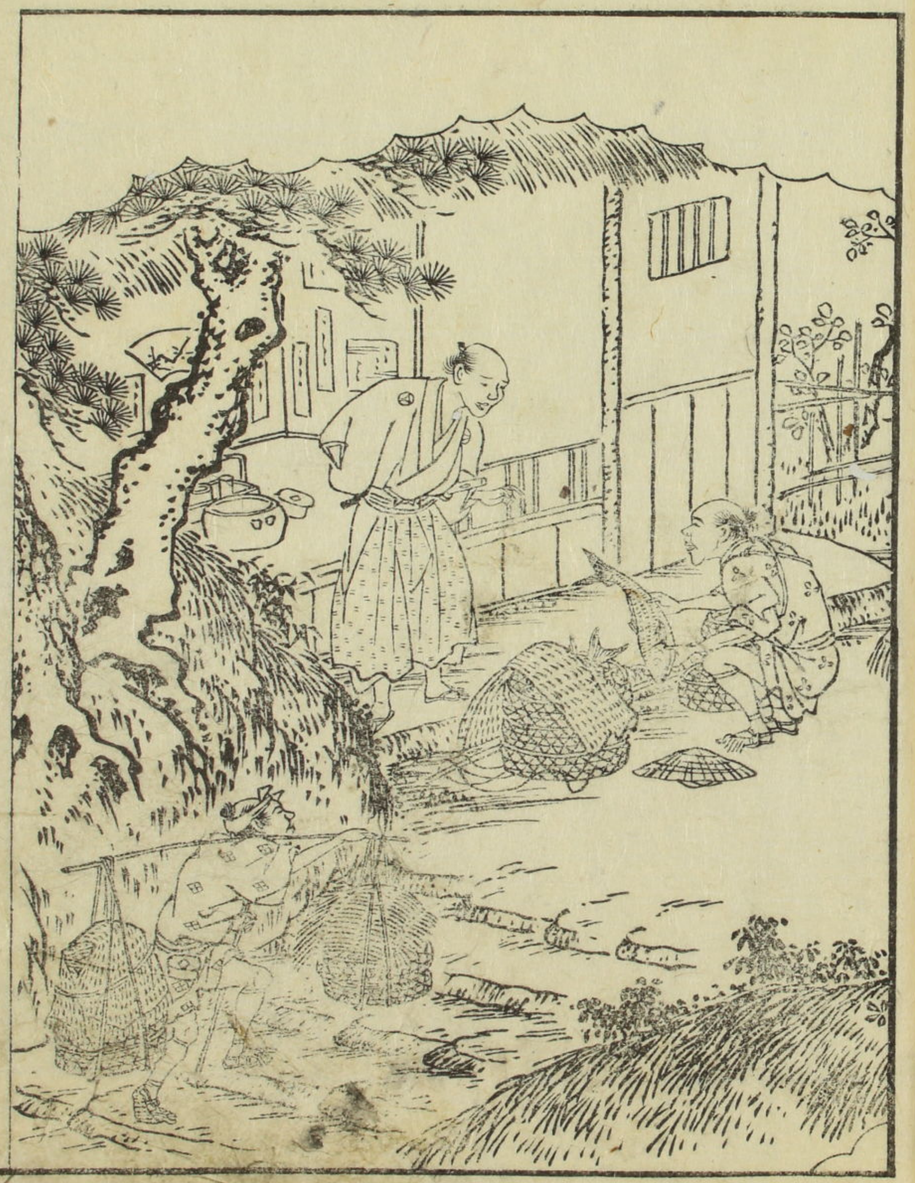
御池巡り凡百八十間あり遥拝石の
橋と申す石橋之間あり此水ゝ云 ○河島神社拝石 渋原附属の社なり
橋宮 大石の左の
方石壇なり 石祭未見 開耶姫命 橋神 小朝熊の内橋大力自神なり
神戸なり 此橋の一本松神と崇む
則小朝熊に坐ゝも此ゝ俗せ遥拝を
続古今 神風や伊勢の山おろしはげしくとも花の香をのみ吹きとめよ 西行

○河原神社 石祭 織津姫命 社壁尾村なり 橋の宮の辺なり
渋原宮附属の神 神号未詳
由貴殿 一殿の 後ゝ ○酒殿 神酒を造る 此二宮共酒殿の院内 此酒殿より天
逆右力天の逆鉾を納む深秘の旨あり ゝ三祭の第一度毎に献る
御饌ゝ更毎に新に収むる院 由貴という故清むるの名 三祭は六月九月
朝廷遥拝石 由貴殿の傍橋 十二月の神ゝ なり
宮の西の石壇 帝を拝ゝ奉る石なり
ゝ良殿 二の名右ゝ入ゝ右の方 ゝ細外宮ゝ
附言 風の宮橋の第一 ゝ良物忌ゝ
慶長十二年國母より内宮ゝ良の鍬ゝ貝殿の鍬一具を賜るゝあり今ゝ彼鍬に
其貝殿の蓋のうちゝ双方ゝ紙あり て其河云
神風やうもをそ川のそのうちゝ水者あり 勢多の神つゝの外のほとゝ
神風やうもをそ川のそのうちゝ水者あり 勢多の神つゝの外のほとゝ
をもちぐさむべきものの石のもてあそびものゝ ゝてかゞけなくも國母仙院ゝ
備をゝぐ 給る彼大神宮補弘がまきをたゝ神宮松のむゝ之と俗ゝ名も石なり
このあたりやゝ小しあはせらるゝたゝ右みまうちゝるゝ の名の二ゝもこの橋ゝ より





あ所ゝ所ゝ所ゝ



御贄小屋

八百會遥拜所　多良の館の西の方花の石つゝ　八百万神を拜〳〵奉る

瀧祭宮　舞立別宮　多良館南の道の東　花の方の石つゝ　祭沢女神又い吳都波神芸や

ていすゝへゝう神殿いなく石壇のゝ辺水の神を崇む又澍の宮の女社い又十絵川西の岩九ゝの下に岩の諸岩より

荒ぶる澍あり　これを澍ぶの宮ちゝ　澍ぶの宮ゝて神位も荒祭宮につゞく位也ゝ御宮なき方別宮ゝい

荒ぶるお姿び崇秘の別宮ゝて神位記又曰澍ぶの宮其神也神位記又曰澍ぶの

不入もあり　澍原姿宮位一不又入ぬもば是を舞立ゝ加ふるなり

瀧宮姿宮　澍ぶの宮ゝ　さらび殿す

夫木　浪とゝ見ぬ花の志ゝ川えの岩枕澍の宮ゝや書よゝむゝん　西行

仝　澍の原さらひの宮ゝ神なゝ狩来ゝく沖津ゝ浪　為家

系流紀云　澍ぶの神ゝて河の洲後又松板なんどの一むゝ立てる斗ゝて御社もゝまゝまと

ど神神を水底ゝ御座とうやゝ

系流紀云又十絵川と御裳濯川の落合ゝ不ゝ松の御迂

河原後所　風の宮の後ゝ　澍ぶの宮の間ゝ　○宮の多ゝ〳〵の神宮所ゝ〳〵出〳〵ゝて御後ゝ

殿へゝなる花の原御後と号く帝ゝ御即位の式ゝとゝ云

落合川原　澍ぶの辨不の花の原所ゝ

後門系集　澍ぶの神宮ゝの月移の本をゝよくゝ立てくゝもをゝ川のゝ〳〵の為あひの

川原ゝうけゝえゝたれば

川いとや神路の岩ゝ出ぬら御河のゝ〳〵ひげをゝ

前大僧正　通海





河合社　澍宮石壇の南　河合ゝ石つゝあり　不祭細川水神儀式帳名社十二不の内に不御迂宮の

澍神宮を清ゝ奉る不之　右毛までの所ゝ多侍ゝ人いれより一のゝ石に出て孫宜の

宮鉢の模ゝより御殿ゝ又風の宮のゝ〳〵を澍ぶ垂ゝ

なゝ〳〵出ゝ人いゝ良の鉢のゝの上方垂木のさゝ〳〵ゝ石形彩て殿ゝ〳〵ゝ

御殿　後所　ゝ古い内外の御殿二不ゝ〳〵ゝとゝや神馬いゝ〳〵ゝ和座をゝ進らせら

殿を代中絶ゝて今い尾張家ゝゝと久殿ゝ又代ゝ進らせらゝ之者

御馬飼内人ゝゝ〳〵ゝ絶の職掌ゝ〳〵ゝ中ゝゝ絶ゝ今ゝ内丁斗ゝ御馬飼内人再真ゝ〳〵ゝ

高倉殿　御殿の後ゝ石壇ゝ御迂宮の時ゝ代御神宝ゝどの拵換ゝ〳〵ゝを收ゝ

且〳〵御倉の跡ゝ

山神社　宇治橋の東ゝ祭神大山祇命　此不祭石毛田ゝ〳〵ゝ岩殿ゝ〳〵ゝ

いる安の神社ゝ本殿周邦姫を祭る　此辺俗和飯を賜ゝ〳〵味名壹之

石毛神社　石毛田ゝ　これを巖の社ゝ〳〵ゝ　儀式帳名社十又不の内ゝ毛神末社

荒本田氏社　此不ゝ〳〵ゝ四ゝ　近年田辺四張ゝ社ゝ〳〵ゝ又此傳ゝ守武社あり

荒本田の祖神ゝ天見通命　田辺郷ゝ色ゝ　ゝ守武霊神を此宮ゝ〳〵ゝ

○守武神　ゝゝ大永天文の比内宮の長官荒本田氏ゝて歌人ゝさらに連歌

の式をとゞむ猶吟のみ白髮神百首の狂歌あり宇治の山より雜宮の生茶徐福

和奥うくふまつ人ゆゝん我世うる

神路山我きゝかくまを紛をもるものまの風〳〵

天文十八年八月九日　一孫豆守武

元日や神代のことも初もうゝ

△内宮系譜絵巻に曰南海雜宮より鎮座のありて二見より川傍辺りまの

御贄小屋　大宮の右の方に小屋あり磯辺の洛くか川傍へ拾生る魚蒔の砂穂

を毋に納む外宮御贄柳に同し

一の瀬　これ内宮より磯辺村へ紛るゝ磯辺村とあまさの川とまゝ紛るゝ神ゝとゞ一の瀬とゝ

なり川に龍石あり

三方石　板坂より西〳〵あり左の川ゝより九一丈巳方もみゝと石の半中に一株の松生ひ

三方に三方に唯〳〵

板坂　内宮より三里まで一里ゝ三巳町ぞ川とまゝ磯ゝ一丈ぞうゝあり

激ぐ甚激〳〵甚激壺の西方へ石窟出て其石の下空ゝて人家の掘のおゝ〳〵を上に

のゝりてゝる

に甚をゞ」○長尾　板坂より七町長の方へ此ゝ巳又六巳巳方ある二つの

岩より川沖へ出れに三ゝ余に成六るの石あり紛人川上ゝ〳〵あり

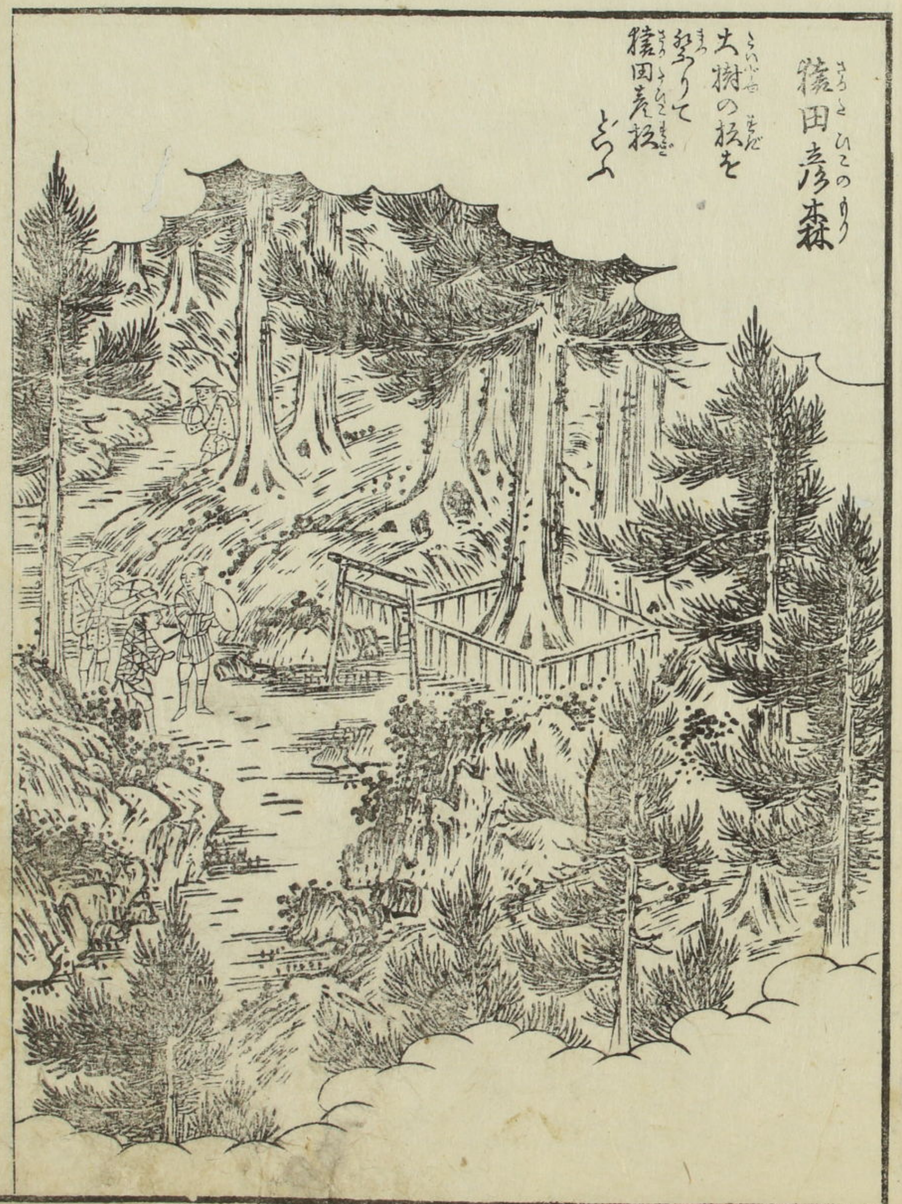
此上に酒者をゝき居すあゝもゝ魚に名付〳〵

ぐ紛ようゝ○獅子鼻石　者のつきの岩に

く名ぐく○鮎留石　鮎石の淵に成あり此岩のゝ面

ゝ流をひくゝ





瀧祭窩
宇治山田ゝ
ゝ是を
風穴と
五十八

合坂 坂坂より又十町家々地義堂あり[illegible]
此石猿田義太神倭姫命より出合〜故合坂とゝひ伝へとぞ

猿田義太森 合坂より下此石森の坂のそば汗枝ゐ生へり左あるゆゑ

瀧祭窟 合坂より[illegible]の右の方にあり 茶屋あり是より爰へ二町半ばかりて岩窟あり

其穴に入ること凡十間ばかりあり瀧み瀧祭寓と標石を立てり

家立茶屋 合坂より[illegible]あり此石猿辺村御師より糸宮人を出迎へ来たり

甑石 家立より[illegible]十余町を[illegible]石へ移る石の右より大晦日の夜湯気立とゝひ伝へ

鼎石 甑石より二町半下る爰にあり 鼎石右神と標石を携る石離あり是を神宮の地と賞

[illegible]〜石之ゝ弘昌華と石鼎と云て山人の器用ゝとて龍頭瓦腹詩有

巧匠斲山骨剗中事煎烹直柄未當権塞口自吞聲 下畧

宮川 此名いづゝの河より[illegible]

鸚鵡石 是を和合山ゝ云 街道を三町 高サ十七間 横七十間 物の音に響く石の拍ゝ

[illegible]〜其夢を[illegible]石ゝ云夢の[illegible]を殺[illegible]石とゝ[illegible]此外

[illegible]岩絡かけ松[illegible]尚図上[illegible]

家立茶屋
猿田義太神此地を問さ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

鸚鵡石　亦名和合山

きゝ石の遠うて
石碑あり

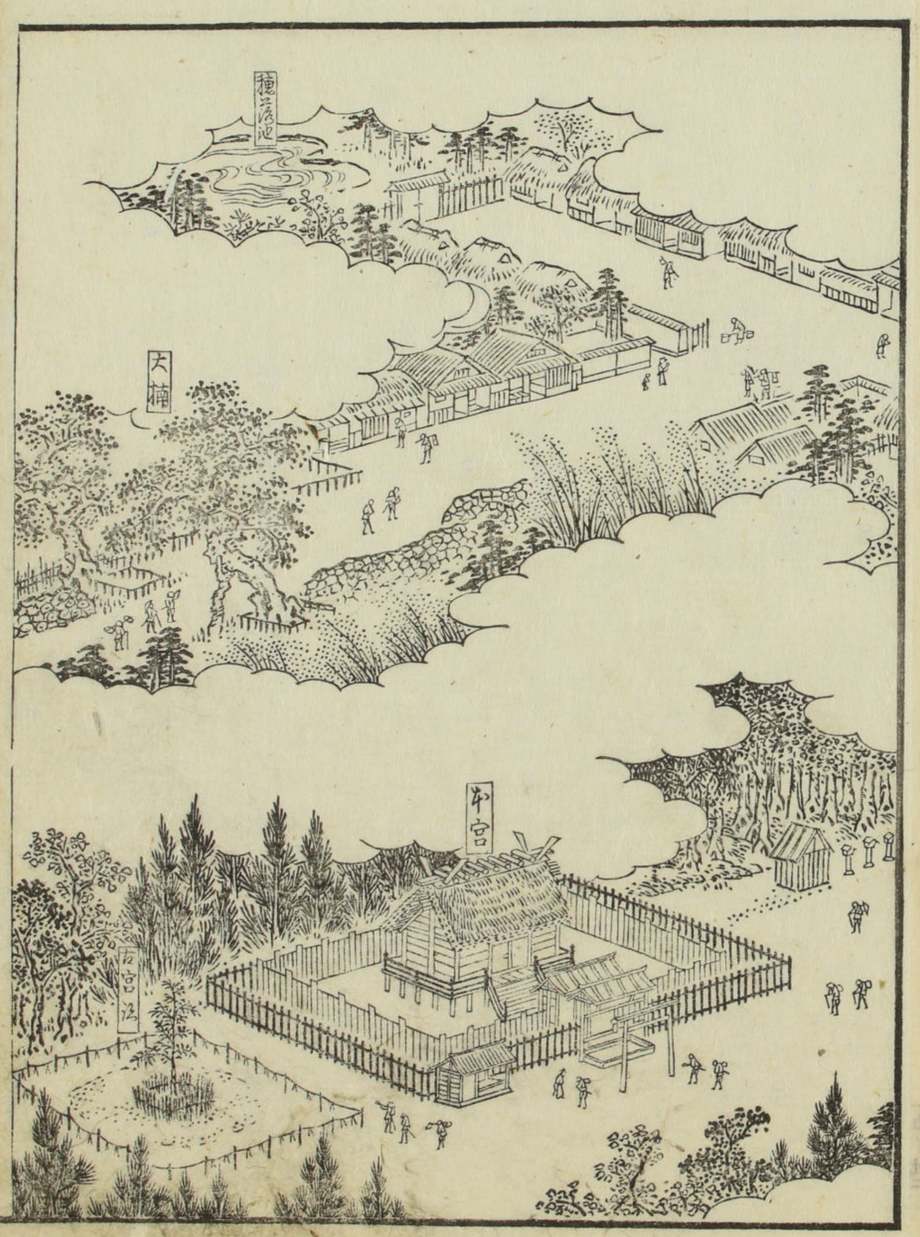
うぐひすや内外よ
もうる紅あやむ石

東都文治
合散堂
木言

此石に淋しさ
岡ん杜の夢

天柱舎并
仲書

伊雜宮
俗に豫部の宮とも

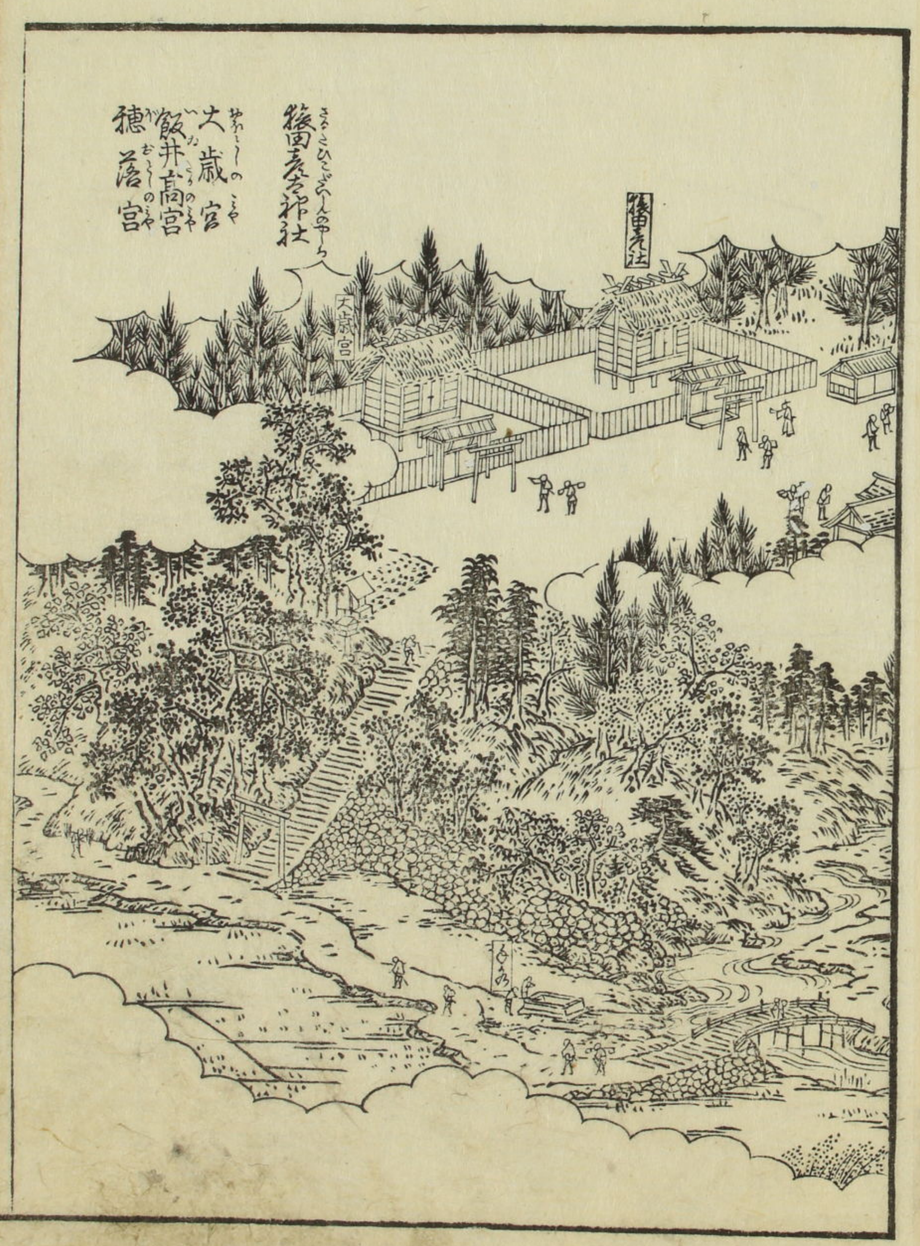

大楠
本宮

其二

非抵百首

秋の田の
穂落しみ
非ゆつつへを
畑り人の
えしり
鶴ん弟代

度會えん長

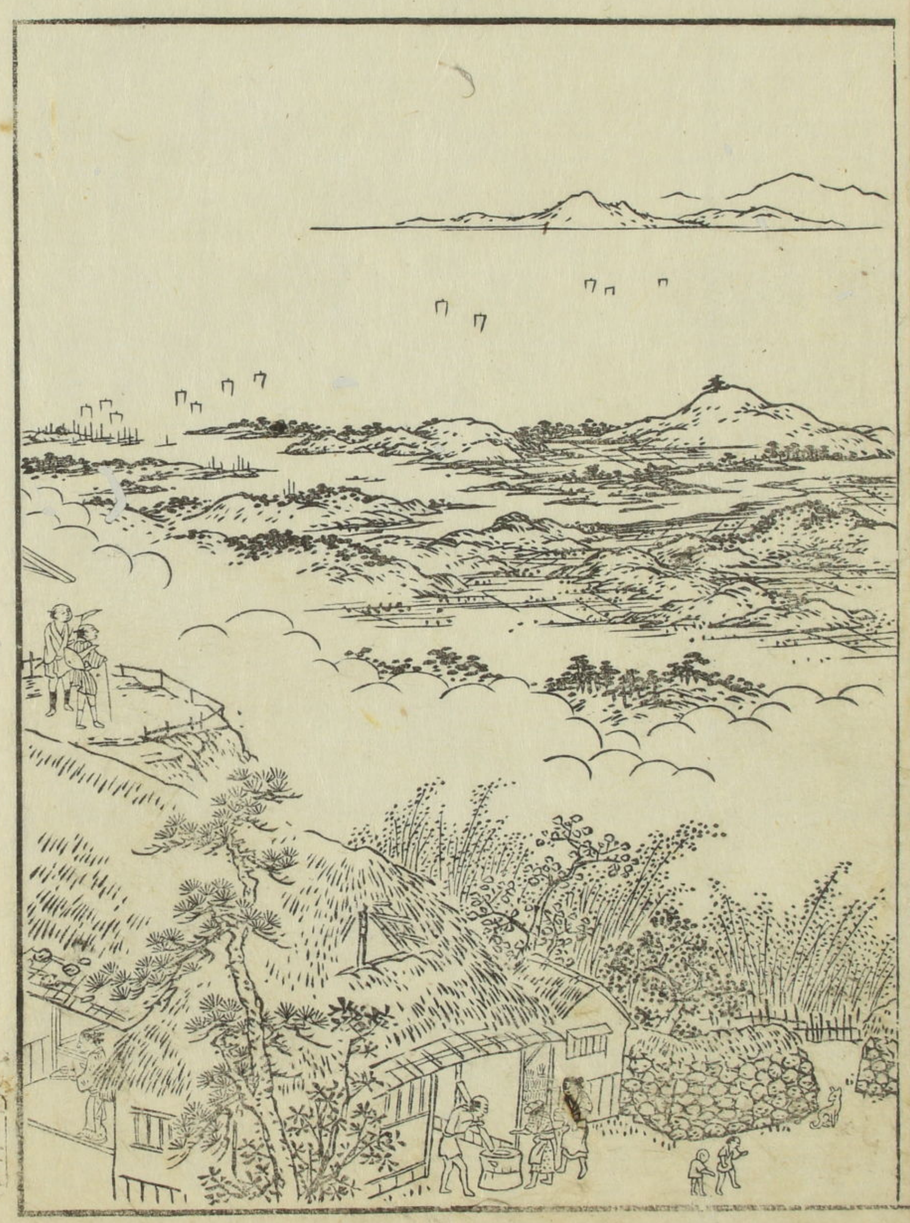


倭姫命
視咋鵠

惠利原　○本郷村　惠利原村の又上の村なり此所より船熊谷羽への路あり

伊雜宮　伊雜村より俗称辺村なり　内宮別宮の其一なり内宮より三里　延喜式に伊雜の方葬原の中にあるの明神なり　倭姫世紀三日方に神宮御鎮座の始伊雜の方葬原の中に一宇の殿を造りて倭姫命を遷し奉り給ふ　倭姫命世紀に曰く幸行給ふ

楠部休



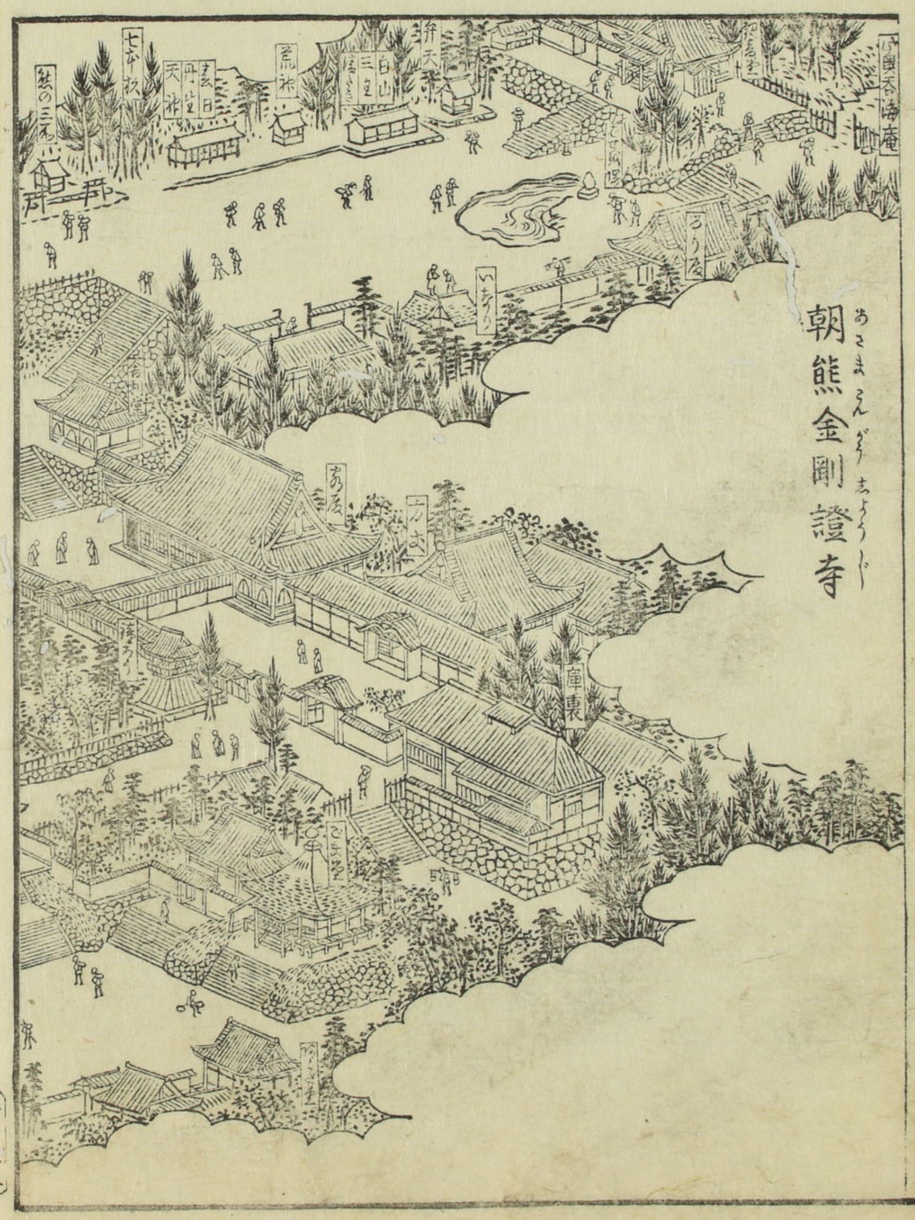
朝熊岳

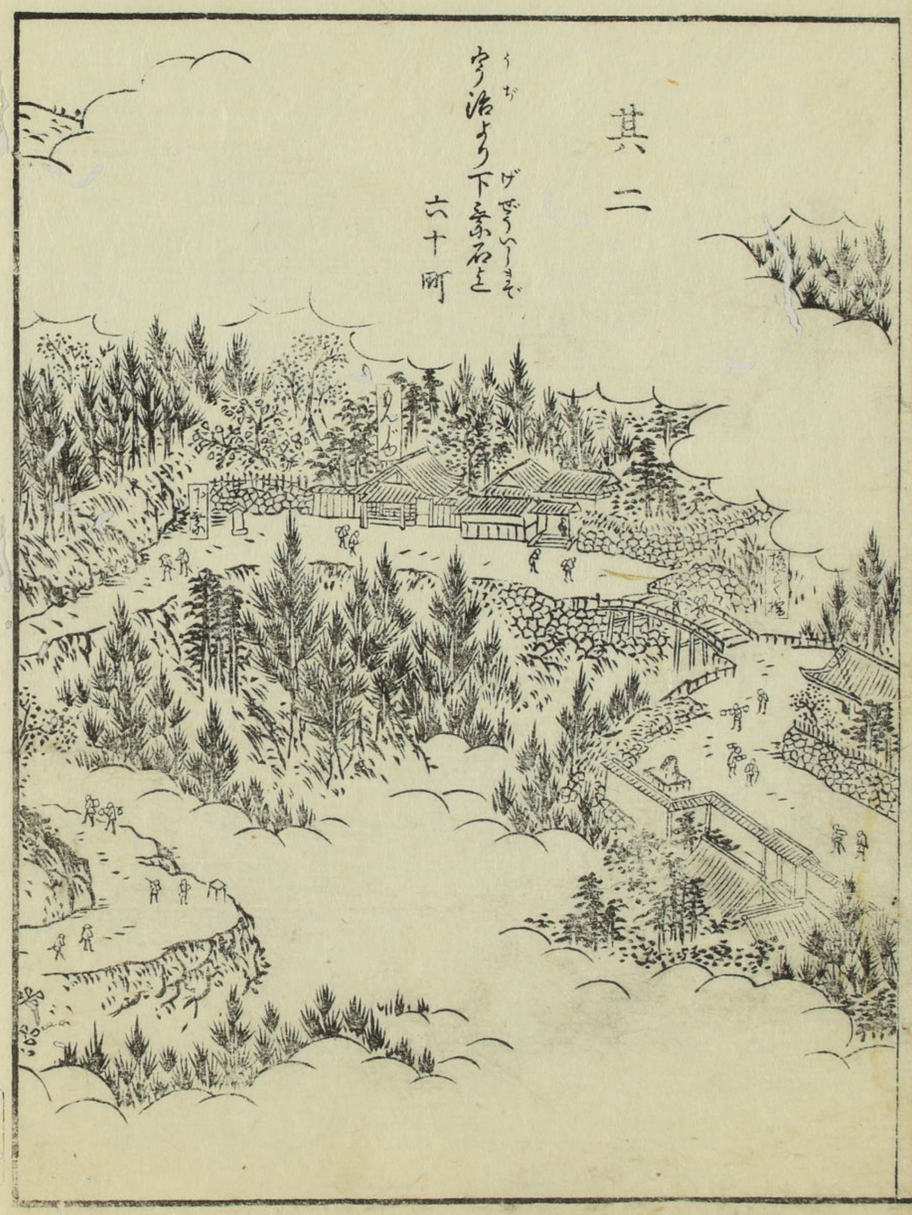
右北宮御詠
いつも我身
朝熊のこみ岳
人のうつひと
五十鈴川

薬の基盤い秋田城之人々不拭の業とそに辺之西湖を画さて其制巧なり須〳〵草莽の碁盤と
〳〵ゝ〳〵みゞろゝ〳〵を〳〵ゝ〳〵の碁盤と畧〳〵〳〵ひ〳〵〳〵ゝ
○求聞持堂　これを明星堂ともいふ　求聞持法を修し其験あり法名不空山の僧空海の虚名紀を式あり法名不空山の他邦にて
堂　○橋楽橋　石橋を架る　昔は板だゝ　○熊野三社宮　○文殊
○阿弥陀堂　○二王門　往古此門又勝峯山の額を名解梅隠が書をゝ〳〵
なり池　○たまの池　竪十間ゝ　○連珠橋
〳〵歌　竪十間ゝ十六間許池中和安器〳〵
雲陽雑記天照大神の御誕〳〵　〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ

朝熊奥
吾海庵
富士見臺

曾聞人説思重〻
吾海庵前望士峯
四十由旬半空雪
雲間一朶玉芙蓉
村庵


あさまんぐちょうじ
朝熊金剛證寺
庫裏
弁天
白山
三王
七ヶ松
玄日
丸山
天狗
荒神
法の三ヶ
いちり
ろうそ
あ屋
ハ十さ
ハ十さ
ハ十さ


其二
宇治より下奈良迄
六十町

古屋
麻湯村

小朝熊社
後の宮
汲干所

田家の祖こ國政不直の罪を蒙り此所に左遷し終に卒せ今に墓地田家より祠堂料を出らる其塚ハ五輪に梁寛入石に弘道に達して能書乃名あり 此所に幾多但馬ひしやゝ息女と妻との法名を玄帳に記まこと彩金丹もこの家へ秘方を伝へらるゝ

○同寺に福原右馬助墓あり 此碑高サ巳尺余横二尺斗苔むして文字不分

○一任殿順積道温禅定門濃州大垣城主福原右馬助慶長五年十月二日
○心誓一誥居士家臣福原喜三郎○又真得如珍居士家臣名字不明碑三ツ有

〈鈴鹿村西のさかひより小橋を渡て右へ行ば二丁乃至山田辺村に至る

山田乃之鈴鹿村を西に一宇田村にゝる家の北中に右へ行ば東麻海村にゝる

小朝熊社 麻海村東 俗武帳ゆい祭神撞大刀自命 若宮神 鈴鹿水神 三座也

今ハ櫛玉命 大歳神 大山津見命を加へ山の座とも内宮摂社二十四座乃

其一也 寛文十年大宮司精長鈴鹿田地を内宮に再奥あり しかるに往古鈴鹿の岳に在しけるゆへ小朝熊うつしなんことさだまるゝ事に出て 系諸記の文をかりて

岩風に岩根のさゝら吹くびに浪の花ちる朝熊のうや

祭主 定忠

○鈴鹿峠 小朝熊の宮の東 名所 橋本黒 田の字に有 所 橋本黒 田の字に有 畳川村にあり

いくせんかゝ数深き谷のあさ海ゝの代や

中務卿 宗良



彩名所和合

鈴ハまや神代より咲そめ今ハ心ぞとゝまれさゝゝ本丸さ

蓮宮 鈴鹿より又四麻海村 石上神社の社ゝ也 此社ハ神代より咲そめ

神蓮のすハ正治年中の解文に社頭并に神蓮も孔雀の時ハ石ゝ麻乙也

たるものの多く掘出せり内に一つの古蓮鉢あり 中大宮司精長社頭造立の時に中ゝ神宮の形ち

のごとし 依て神蓮なるを知りて 鉢を寛文年 彩殿の内に安置せり 社頭造立の時に中ゝ神宮の形ち

今に蓮と云ふ 神代と云ふ 此石獅子伏石沒于石なるあり

蓮拾遺

神代より老ゝをとして鈴鹿やかゝ丸宮に丸月新 隆弁

畳川山 朝熊山乾の方に有 鈴鹿宮此所にあり 長明伊勢記に ひる川の横根に見也

俗ヒルカウムヒルガウ田ゝ

月に米ぐひる川に雲消くひるもゝえぬ塩合の玉藻 長明

麻海社 西麻海村田中に有 石祭稲依比女命 大歳神の児

浜合 通称 二見の江河に又十丁乾川の末に東西の湊より落る浜の宮に浜合と云ふ俗

西大神宮の御塩を汲む濱 此所河口に有 浜の干潟に歩行して 堤の辺に茅やあり 左りに

尤の方に 濱へ行る 三町 行けば

○浜合濱 浜合と云大宮に神社の浦より 名所 有 合の大宮より 巨石有

月に米ぐひる川に雲消て光もゝらぬ浜あひの玉藻 長明

荒木田 尚良

歌占

信濃の三津村長會者の家が
まあまあ占のあたると傳へ〳〵
本家に伝もるが故〳〵
きれい俗曲の著作せ〳〵
あたも二人さきの家次
とりん〳〵う其実者も
さ〳〵ぎれども法圓一見
の途の絶記〳〵てやがて
藤生〳〵の繁〳〵
占の縁伝にて我が幸自
九のめぐりあひ見地ぐの
物ぐうをさ〳〵つ〳〵れ〳〵
いえ又信勢や日向の
山居ともう称

山田原 境合のさゝ一への村三津村のでさかう
左の方ハ西行物語なハ後名所流淚陵の絵ゑ付そうとゝ云ふ
新古今
いさうとゝもたゝをせにせん河をゝ田の原はゝ秋のむらゝ 西行

○西行法師の旧跡 ゝ田原村の
寺あり〜かゞも今ハ西行安置ゝ西行
谷ゝも云 宇治の西行谷よりハ遠く伊勢國ゝ云ふ
谷ゝあり宮川ゝ合ハ
ゝ地ゝ撰ゝ 此所石ハ溝に村の跡なり ○隼人古墳 境合ハ西川ゝ
星人此所石ハ隼人原ゝ
村ゝ探部ゝ武則法黨ゝ
三津 朝熊よりのゝゝ山田よりのゝゝ出合て此村ゝ度會家次ゝ末裔小村某ゝ云ふ思ふ
ゝ見ゝ多ゝ者皆此所ゝ居
を沸乘を 赤地の後の上ハ八枚の短冊絵ゝ付ゝ弓の本ゝ
神ゝ後ゝ
八枚の短冊ゝ
ゝ
ゝ

二見三津
三津
うり舟

帝釋堂

鷺島　一二町程の後ろに小松多く繁の形なり　○やどりぐ後右の方にあり　○御座石　光山西一所にあり　中程ちくず　○九山　はあり

○名ヶ森　一所に方程の後ろに亀の形なり　○姫小松　東の方三所にあり

伊勢三郎義盛宅地　三澤村より　山の林薙右の方に流れ寺の竹林　義盛祈願の三郎

獄より繁くる故ろくみ及んで上神の荒蔭なる故に盜を仕業とし義経奥州へ出し時

義盛が家に宿つて義盛が客貌奇なるを怪しく思ひ糾して遂に相給へ　義経都を去り及んで吉野へ

義仲亦平家追討の為に京師より西国八幡壇の浦まで軍功

義盛教盛を捕へ義経都を去り及んで吉野へ　義経奥州へ出し時

あり伊勢三郎が祝しの苦ましく思ひ義経を拒んで於藤ヶ谷に遂に義盛自害　○硯石　山後

中より流れ出る水なくして早苗植付の時に干ぬ　○をさう岩　硯石の上にあり　名

立石　立石侍の家の村　此ところより御塩殿へ約三町あり　宇治山田のさと人立石侍

あり茅屋あり　みな漁をして尚酒飯美味をなす

休息所にして尚酒飯美味をなす　みな漁の家の村

堅田社遥拝所　立石村出ヶ浦の侍の家あり　祭神彦根都比女命　一座内宮末社の

一所舎人の屋の内に社あり

内宮末社祭神二座速方堅田神　大倭姫皇女　とゝも未詳

出口村氏社　堅田社の内にあり出口村

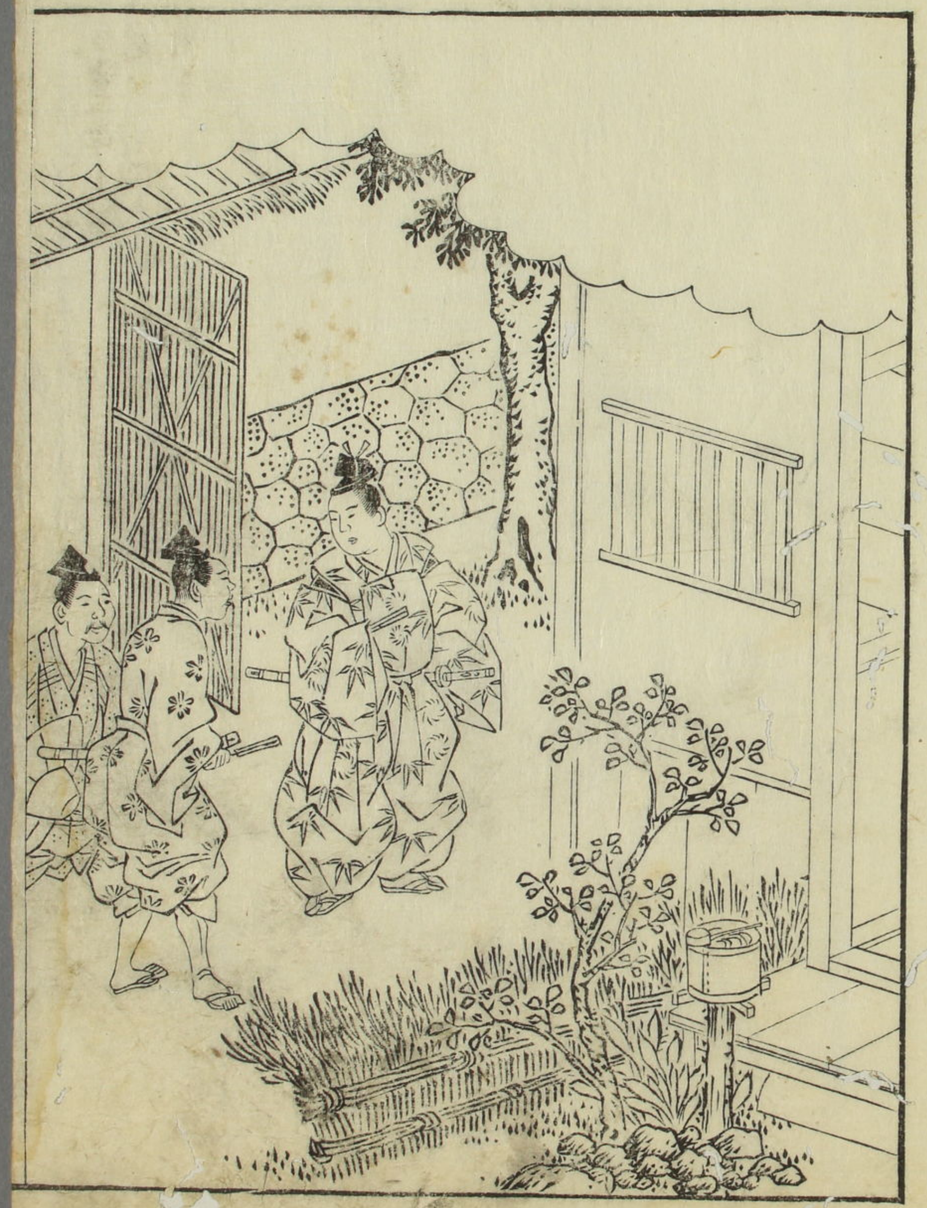
音無山　此名所堅田に二つ外宮祈願の山二つ内宮の山



二見の書　二見の書　二見の書　二見の書　二見の書

二見の書　二見の書　二見の書　二見の書　二見の書

二見の書　二見の書　二見の書　二見の書　二見の書



伊勢三郎義盛見へくる迄後を繋ぎ

これを始めとして

○山田より二見の明路

河崎 北田村能之山田より二見五石を二里半余なり 此地毎日魚市あり民屋廣く甚繁し

伊勢曜河崎青蓮寺より

家は多く西北の後よさ湊なり

○河邊里 河崎の

右名所

新名不可合

もむ人やくるれいまもこの集らんこの辺の里の花ぶ蛍う那 荒木田尚長

二軒茶屋 河崎の往還にて茶屋あり山田吹上所より小祭物を経て宮へ参るもあり

黒瀬 二ケ所茶屋を右の森の内に社あり此村の氏神之橋 諸見公を祭るとぞ

常相寺 宮の傍にあり 南都興福寺の橋と同種なり 其実を知て小之 俗云菅原興福寺の橋

毎年天王に貢ぎ不此実を求めて代りなるべきかと

ぞ

おのころの伊勢にまる人神とは生まれてくたよう蛾〜さ花相寺歳

按ずるに伊勢の湯ゝ〜此所い巻者大僧正の御〜て慈参ハ天石の屋ゝ此所い来ぐ相寺の人の遣りしゝ〜〜湯見之の母い縣先養宮孫三ケ代とく伊勢の人なり故ゆ此寺に宮第相寺の先孫なる紙浮ひて湯見ゝ為ゆ万葉集見ハう

万葉集

ぞちの花い実さ人花さ人其ハ葉さ人枝ゝ霊相けとゆ〜と言ハ来



聖武御製